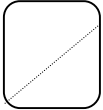


宮沢賢治「よだかの星」③

| | |
|----|---|
| 名前 | |
| |  |

○つぎの文章を読んで問題に答えましょう。

よだかは、じっと目をつぶって考えました。

(「たい僕は、なぜこうみんなにいやがられるのだろう。僕の顔は、味噌をつけたようで、口は裂けてるからなあ。それだって、僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない。赤ん坊のめじろが巣から落ちていたときは、助けて巣へ連れて行ってやった。そしたらめじろは、赤ん坊をまるでぬす人からでもとりかえすように僕からひきはなしたんだなあ。それからひどく僕を笑ったつけ。それにああ、今度は市蔵だなんて、首へふだをかけるなんて、つらいはなしだなあ。)

あたりは、もううすくらくらくなっていました。よだかは巣から飛び出しました。雲が意地悪く光って、低くたれています。よだかはまるで雲とすれすれになって、音なく空を飛びまわりました。

それからにわかによだかは口を大きくひらいて、はねをまっすぐに張って、まるで矢のようにそらをよこぎりしました。小さな羽虫が幾匹も幾匹もその咽喉にはいりました。

からだがつちにつくかつかないうちに、よだかはひらりとまたそらへはねあがりました。もう雲は鼠色になり、向うの山には山焼けの火がまっ赤です。

よだかが思い切って飛ぶときは、そらがまるで二つに切れたように思われま
す。一疋の甲虫が、よだかの咽喉にはいつて、ひどくもがきました。よだかは
すぐそれを呑みこみましたが、その時何だかせなかがぞっとしたように思いま
した。

雲はもうまっくろく、東の方だけ山やけの火が赤くうつって、恐ろしいよう
です。よだかはむねがつかえたように思いながら、又そらへのぼりました。

また一疋の甲虫が、よだかののどに、はいりました。そしてまるでよだかの
咽喉をひっかいてばたばたしました。よだかはそれを無理にのみこんでしま
いましたが、その時、急に胸がどきどきとして、よだかは大声をあげて泣き出しま
した。泣きながらぐるぐるぐるぐる空をめぐったのです。

(ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのた
だ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つら
い、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死のう。いやその前にもう鷹が僕
を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向うに行ってしまうおう。)

問題

「それがこんなにつらいのだ」とありますが、「それ」は何をさしていますか。
本文のことはを使いながら八字で答えましょう。

| |
|--|
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |